

トランスペアレンスィーを 求める時代

池田尚治



必ずしも聴き慣れた言葉ではないかも知れないが、トランスペアレンスィー (Transparency) なる用語は現代社会の中で重要な意義を持つ言葉であると思われる。辞書を引けば、透明、明瞭、簡明、などの日本語が該当するし、講演会や会議の時に用いる OHP (オーバーヘッドプロジェクター) のフィルムのことをトランスペアレンスィーと呼ぶこともある。

ヨーロッパでは、ヨーロッパ共同体の確立を目指して種々の組織や基準の統一が進められているが、過去の枠組みを越えて新しい規範を形づくるには、大多数の人々からの賛同が必要であり、そのためには組織や規範は可能な限り合理的で明瞭なものでなければならない。そこで最も基本的に求められ、かつ、人を説得しやすい概念としてトランスペアレンスィーなる言葉が必要とされるのである。一方、それぞれの国には固有の文化や技術があり、また、自然の条件も異なることが多い。そこでトランスペアレンスィーだけではなく、相互の関係にも配慮することが不可欠であり、ハーモニゼーション (調和) なる概念が登場することとなる。「調和」という言葉から受ける印象としては誠に心の安まる響きを感じさせてくれるが、実際は「調整」あるいは「妥協」の結果として得られるものであり、ハーモニゼーションを目標として作業を行うことは相当に難儀で辛抱

のいる仕事である。

ヨーロッパ共同体の誕生に伴って早速必要となるのがヨーロッパにおける統一された構造設計基準であり、現在、Eurocode (欧州構造基準) としてその全貌が明らかにされつつある。Eurocode の制定に当たっては、合理性 (Rationality) と明瞭性 (Transparency) とを基本として起草された CEB・FIP 模範基準 (CEB・FIP Model Code) をベースとしており、これに調和 (Harmonization) という過程を経て、ヨーロッパ共通の構造基準が誕生することとなったのである。

ヨーロッパでは、合理的な設計基準の起草を目標として多くの議論が行われ、限界状態設計法がその目的達成に最適なものと考えられて、CEB (ヨーロッパコンクリート委員会) を中心にモデルコードの起草が鋭意進められてきたのである。また、単位系の統一についてもヨーロッパを中心に進められ、国際単位系として SI 単位系が誕生することとなった。今から考えてみれば、限界状態設計法や SI 単位系は、ヨーロッパ共同体の設立と深い関係があったことが理解できる。つまり、既存の枠組みを越えて発展するには、トランスペアレンスィーを基本とした合理的な取組みが必要なのである。しかしながら、CEB や FIP (国際プレストレストコンクリート連合)、は権力機構ではないので理想的な概念を提案はできる

が、実際の社会にこれを適用する段階では、どうしてもハーモニゼーションが必要となるのである。SI 単位系による統一と言っても、日常生活の中で「重さ」の尺度を消し去ることは適当とは考えられないのであって、適切なハーモニゼーションが必要であろう。

さて、CEB はモデルコードを起草する役割を果たしたことから所期の目的を達し、今後の目標と組織の意義について模索中のようなのである。CEB は Comite Euro-international du Béton の略で「国際」という字を後で入れてはいるが、本来はヨーロッパ中心の組織であり、これを国際組織というにはトランスペアレンスィーの点で日本から見ればわかりにくいと言わざるを得ない。

トランスペアレンスィーは社会の中でも強く求められており、建設会社の幹部と政治家とのつながりも新聞やテレビで詳細に報道されている。建設会社の幹部は恐らく自社の一層の発展のために鋭意努力をしたであろうことが、また、自由主義体制を守るために一部の政治家を支持したであろうことが、ソビエト連邦の崩壊に伴う時代の急激な変化から取り残され、結果論としてのトランスペアレンスィーのもとに責められているのである。しかしながら、競争入札によって値引きをさせられて適正な利潤が得られないようであれば、決して長期的に見て合理性があるとは考えられない。トランスペアレンスィーを求める場合、制度の矛盾や評価方法の不合理を先ず解決することが必要であり、それなしにトランスペアレンスィーを求めれば、大きな誤りを犯すこととなる。倫理的な評価は時代とともに大きく変化するものであり、三権分立の筈が、知らず知らずのうちに司法が突出し、司法に頼り過ぎるのは問題であろう。トランスペアレンスィーにはハーモニゼーションも必要なのである。また、この言葉の反対語としてファズィー (Fuzzy) という言葉が使われていることも認識したい。

単純明瞭になり得る事柄を敢えてファズィーにしておくことは決して好ましいことではない。我々の学協会の中に倫理委員会をつくり、自ら常にトランスペアレンスィーを求めて活動することが必要なであろう。それによって必然的に制度や評価方法が合理的な方向に改善されてくるものと思われる。

(いけだ・しょうじ／正会員)
横浜国立大学教授
工学部 建設学科

